令和 7 年度「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」
（人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム）
通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業

オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査（通信制高校）報告書

2026 年 2 月

学校法人 YIC 学院

目次

1 調査概要 4
1.1 事業の背景・目的 4
2 オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査 5
2.1 調査概要 5
2.1.1 目的 5
2.1.2 実施概要 5
3 対象校の概要と取り組み 6
3.1 聖光高等学校 6
3.2 誠英高等学校 10
3.3 松風館高等学校 14
4 ICT・オンライン学習環境比較 18
4.1 3 校の ICT・オンライン学習環境の比較 18
4.2 共通する課題 19
5 考察 20
5.1 地域密着型人材育成モデルの必要性 20
5.2 入学前からのキャリア教育と伴走型支援 20
5.3 段階的なデジタルリテラシー教育と環境整備 20
5.4 地域産業に直結するキャリアパスの提示 21
5.5 管理業務の ICT 化による教職員リソースの最適化 21
5.6 結論 22

1　調査概要

1.1　事業の背景・目的

現在、地域産業における人材の空洞化や生活サービスの維持困難といった課題が顕在化しており、地域に根差した教育機関がその受け皿として果たすべき役割は大きくなっている。特に、通信制高校など多様な背景を持つ若者に対して、接続性の高い進学ルートと職業的自立につながる実践的な学びの場を提供することが急務である。

本事業は、通信制高校との連携を基盤に、入学前からのキャリア教育、在学中の柔軟なプログラム設計（オンライン学習・コース選択制・企業連携型の導入）、 AI や ICT を活用したデジタルリテラシー育成、地域企業（拠点施設含）との協働を通じた連携授業などを展開し、「県内初の AI ×データサイエンスを導入したクロスオーバー型新コース」を目指すとともに、「地域に選ばれる専修学校」づくりを推進するものである。また、卒業後のキャリア定着や地域貢献までを見据えた“育成・伴走・定着”の一体型支援体制を構築し、若年層の社会的移動の促進 と地域産業の人材確保・活性化に資する教育モデルの構築を目指す。

『地域密着型人材育成モデルの方針』

・地域からの若者流出を防ぎ、地域に“選ばれる専修学校”を創出する

・学びの多様化とキャリア支援の一体化

・地域社会に貢献する職業人材の育成

・2 年間の枠にとらわれない、継続的な育成モデルの構築

2　オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査

2.1　調査概要

2.1.1　目的

本業務は、通信制高校におけるオンライン学習環境の整備状況や ICT リテラシーの実態を把握することを目的とし、今後の教育支援・教材開発、外部連携の可能性を検討するための基礎資料とするものである。

2.1.2　実施概要

（1）　調査対象

県内通信制高校 3 校を対象にヒアリング調査を実施した。

- 聖光高等学校（光市）
- 誠英高等学校（防府市）
- 山口松風館高等学校（山口市）

（2）　実施時期

2025 年 11 月 21 日～11 月 25 日

（3）　調査項目

「【別紙】通信制高校におけるオンライン学習環境／ICT リテラシーについて」に基づき、以下の内容をヒアリングした。

- 学校・オンライン学習の取り組み方針について
- 授業の実施状況について
- ICT 機器やネット環境について
- 学習管理システム（LMS）の利用について
- ICT リテラシー（教員・生徒）について
- オンライン学習の課題と今後の可能性について
- その他

3　対象校の概要と取り組み

3.1　聖光高等学校

概要

①　学校名	学校法人 櫨蔭学園 聖光高等学校
②　所在地	〒743-0011 山口県光市光井 9 丁目 22 番 1 号 TEL：0833-72-1187（代） FAX：0833-72-1308
③　校長	廣川　晋
④　教育方針	1.　キリスト教による教育によって、宗教的情操や、特性・実践力を養う。 2.　個人の特性を大切にし、自覚と自信を深めるよう自らをきたえ、かつ奉仕と実践への活動人をめざす。 3.　人間連帯と相互信頼の念を深め、人間としての真のしあわせを学びとり、基礎的学力と生活実践力を身につける。
⑤　校訓	常に善を追い求めよ 常に喜べ絶えず祈れ すべてのこと感謝せよ
⑥　生徒数	全校生徒数　　502 名 通信制生徒数 200 名
⑦　コース・学科	全日制 ・普通科（進学コース/社会福祉コース/総合コース） ・社会福祉科 ・綜合ビジネス科（情報ビジネスコース/医療ビジネスコース） ・機械科 通信制 ・普通科
⑧　URL	https://www.seiko-h.ed.jp/

ヒアリング調査日時：2025 年 11 月 21 日（金）13:30-14:30

ヒアリング回答者：坂本憲次（教頭）

形態：対面

【外観】



【校内】



（1）学校・オンライン学習の取り組み方針について

聖光高等学校の通信制課程は、平成 15 年に全日制と併設される形で開校した。不登校経験を持つ生徒も多いため、「まずは卒業させること」を教育の大きな目標としている。現在、オンライン学習をメインとした教育は実施しておらず、週 1 回（土曜日）のスクーリングによる対面指導を重視する方針をとっている。

（2）授業の実施状況について

スクーリングは毎週土曜日に、前期・後期それぞれ 16 回ずつ実施されている。平均出席率は約 80%と高く、生徒は自宅でA3 サイズの問題形式のレポートを作成し、期日までに提出する流れとなっている。スクーリングの時間はレポート内容の解説といった一斉授業に近い形態で行われる。また、生徒の興味を喚起し、卒業率を高めるために、福祉、ビジネス、調理、コンピューターといった多様な選択科目が独自に設定されている。

（3）ICT 機器やネット環境について

通信制の生徒は「1 人 1 台端末」の配布対象外であったため、学校からの端末貸与は行われていない。生徒は個人のスマートフォンを連絡手段や調べ学習に利用している。校内には 40 台のPCを備えたコンピューター室や e スポーツ用の設備がある。ネットワーク環境としてはフリーWi-Fi が構築されているが、授業への影響を考慮し、現在は生徒への全面開放は行わず、空き時間の利用などが検討されている段階である。教員側には 1 人 1 台の PC が配備されている。

（4）学習管理システム（LMS）の利用について

平成 15 年から、地元の業者が開発したフルカスタマイズの校務支援システムを運用しており、出席、成績、レポートの受け渡しなどを管理している。現在は新しいアプリベースのシステムへの移行を準備中だが、通信制特有の複雑な単位管理や教科書管理を汎用システムでどう実現するかが課題となっている。プラットフォームとしてはGoogle のツールをメインで使用しており、全体集会などで Zoom を用いたオンライン配信を行うこともある。

（5）ICT リテラシー（教員・生徒）について

教員は早期から校務支援システムを導入してきた経緯もあり、全体的なスキルは向上している。AI 活用の研修やデジタル採点の導入など、新しい技術に対しても前向きに取り組む土壌がある。生徒については、スマートフォンの操作には慣れているものの、授業でPC を日常的に使う機会は限られているため、「情報」の研究課題を通じてExcel やWord などのスキル習得を図っている。また、SNS 利用時のマナーやルールについても随時指導が行われている。

（6）オンライン学習の課題と今後の可能性について

放送視聴（NHK 高校講座など）による出席時間免除の仕組みはあるが、リアルタイムのリモート授

業をどのように出席扱いとするかといった制度運用の解釈が課題となっている。また、システムの導入・維持費に加え、それらを運用する人的リソースの確保が大きな障壁である。今後の可能性としては、登校困難な生徒へのストリーミング配信や、利便性向上のためのデジタル学生証の導入などが検討されている。

（7）その他

生徒数は約 200 名で、専属に近い教員 7 名に加え、全日制の教員も兼務する体制で運営されている。進路指導では、担任による面談のほか、メールを活用した志望理由書の添削といった細やかなサポートが行われている。また、社会経験を積ませるためにアルバイトの推奨や、みかん収 穫、ボランティア活動などの体験学習を教育活動に取り入れている。

3.2　誠英高等学校

概要

①　学校名	学校法人 三田尻学園 誠英高等学校
②所在地	〒747-0813 山口県防府市東三田尻 1 丁目 2-14 TEL: 0835-38-5252(全日制) 0835-38-6161(通信制) FAX: 0835-38-5353(全日制) 0835-38-6364(通信制)
②　校長	大田 真一
④教育方針	・社会で生き抜く力の養成 ・生徒一人ひとりの個性に合った教育 ・誠の心を備えた人間力の育成
⑤校訓	至誠一貫 　高い志を持ち、誠意を持って努力し、志を貫き通すこと 規律厳守 　本校の伝統を守り、よりよい校風を築くために努力すること 協同一致 　相手の立場を理解し、お互いの触れ合いを深め、協力し合うこと
⑥生徒数	全校生徒数　 550 名(全日のみ) 通信制生徒数 150 名
⑦コース・学科	全日制: ・普通科 (特別進学コース/進学コース/総合コース/調理師コース) ・情報会計科 ・福祉科 通信制: ・普通科
⑧URL	https://seiei.ac.jp/

ヒアリング調査日時:2025 年 11 月 25 日(火)10:30-11:30

ヒアリング回答者:開地弥生(教頭)、西尾元

形態:対面

【外観】



【校内】



（1）学校・オンライン学習の取り組み方針について

誠英高等学校の通信制課程は、現在 150 名の生徒が在籍しており、教員は 16 名体制である。教育の基本方針として、生徒が学校に通ってくることをメインとしており、オンライン学習を主体とした教育は実施していない。主な目標は生徒を卒業させることであり、進路指導も対面での相談を基本スタイルとしている。

（2）授業の実施状況について

紙媒体のレポート作成が学習の基本である。病気などでスクーリング出席が困難な生徒に対し、自宅でNHK 高校講座などの放送を視聴させ、視聴レポートを提出させることで出席時間を補完する仕組みも運用している。総合的な探究の時間には学校のタブレット端末を貸し出し、生徒が調べ学習を行ってレポートにまとめる活動を行っている。レポートの配布は登校時の手渡しが基本である。提出については郵送でも受け付けている。

（3）ICT 機器やネット環境について

専用タブレット端末による「一人一台端末」の環境を整備しており、探究の授業では、校内に構築されたWi-Fi 環境を利用し、ICT 機器を効果的に活用した教育活動を展開している。将来的にはChromebook への移行も検討している。校内の Wi-Fi 環境は安定しており、特段の課題はない。教員には 1 人 1 台のPC が配備されている。

（4）学習管理システム（LMS）の利用について

Google Classroom を導入しており、スクーリングの日程変更といった連絡事項の伝達に活用している。校務支援システムについて、従来は Microsoft Access を用いて校内で作成したシステムで管理していたが、現在は外注による新しい校務支援システムの導入準備を進めている。システム導入により、レポート提出やスクーリング出席状況の管理を一元化し、事務作業の効率化を図ることを目指している。

（5）ICT リテラシー（教員・生徒）について

特定の得意な教員が DX やシステム構築を牽引している。新しいシステムの導入に向けて、全教員を対象とした研修が予定されている。生徒については、スマートフォンの操作には慣れているため、ツール利用のための特別な指導は行っていない。ICT スキルそのものよりも、SNS に起因する人間関係のトラブルを防ぐための情報モラル指導に重点を置いている。

（6）オンライン学習の課題と今後の可能性について

システム導入に伴う初期費用の大きさが課題として挙げられている。外注システムの場合、自作システムのように細かな要望を柔軟に反映させることが難しく、多額の費用がかかる点が悩ましい。今後は、事務作業をICT 化で省力化し、その分生徒一人ひとりと向き合う時間を増やすことを目指し

ている。また、外部から提供される動画教材（セキュリティや SNS マナーなど）の活用にも前向きである。

（7）その他

生徒層は 10 代が中心だが、20 代前半や既婚の生徒も在籍している。進路は就職が 6〜7 割、進学が約進学が3割〜4割という構成である。就職支援では全日制と共有の「企業リスト」を活用し、不適切な企業を排除する仕組みを導入している。大学進学時の入学金負担が重く、経済的理由で進学を断念するケースがあるため、学費面での支援策が求められている。

3.3　松風館高等学校

概要

①学校名	山口県立 山口松風館高等学校
②所在地	〒754-0041 山口市小郡令和三丁目6番18号 TEL 083-974-0011（学校代表） 083-974-0044（定時制直通） 083-974-0066（通信制直通） FAX　083-974-0033
③校長	中野 聡
④教育方針	自立して社会を生き抜く、豊かな人生を送るために必要な力の育成 〇確かな学力の育成 〇協調性・社会性の育成 〇自己有用感・自己肯定感の醸成
⑤校訓	自由・自主・自律 　自分で選びとる自由の中、柔軟な発想で物事を考え、自ら進んで行動する。また、自らの行動を客観的にとらえ、自己をコントロールして、自己実現のために粘り強く行動する。 自尊・他尊・協和 　自分のよさや強みを理解し、個性を大切にするとともに、他者との違いを理解し、認め合う。また、他者との和を重んじ、協力し高めあう。
⑥生徒数	通信制生徒数 1,241 名
⑦コース・学科	定時制：3部制（午前/午後/夜間） 通信制： ・普通科 ・看護コース
⑧URL	https://www.shofukan-h.ysn21.jp/

ヒアリング調査日時：2025 年 11 月 25 日（火）15:30-16:30

ヒアリング回答者：倉重秀治（教頭）、斎藤敏崇（教諭・進学）、中嶋智香（進路指導・就職）

形態：対面

【外観】



【校内】



（1）学校・オンライン学習の取り組み方針について

松風館高等学校の通信制課程には現在 1,241 名が在籍しており、そのうち実際にレポート提出やスクーリング活動を行っている生徒は 936 名である。教職員は 23 名（および非常勤 3 名）で運営されている。教育方針として、オンライン学習を主体とした授業は行われていない。学習の基本は教科書に基づき、生徒が自宅でレポートを作成して提出する形式をとっている。不登校経験者など多様な背景を持つ生徒が在籍しており、個々のペースに合わせた学習を前提としている。

（2）授業の実施状況について

山口県内 7 カ所の支部会場でスクーリングを実施しており、生徒は自分の住まいや都合に合わせて会場を選択できる。授業は教員がプロジェクターやモニターを使用し、スライドやデジタル教科書、NHK 高校講座の動画、YouTube などを活用してレポートのポイントを解説する一斉授業形式が主である。生徒は紙媒体のレポートを郵送または手渡しで提出し、採点後の返却は郵送で行う。 7 月には進路に特化した「特別スクーリング」を実施し、外部講師による就職ガイダンスや卒業生の体験談発表などを行っている。

（3）ICT 機器やネット環境について

通信制生徒には 1 人 1 台の端末配布は行っていない。生徒は個人のスマートフォンを情報収集やアンケート回答、教員とのメール連絡に使用している。生徒が自由に使えるPC やタブレット、Wi-Fi 環境は校内に整備されていない。教員には 1 人 1 台の PC（Surface Pro 7）と大型モニターが配備されており、校内およびスクーリング会場ではWi-Fi を利用して、Teams 等で教職員間の情報共有を行っている。「情報」の授業でも生徒用端末がないため、教員がプログラミングのデモンストレーションを見せる実演形式に留まっている。

（4）学習管理システム（LMS）の利用について

校務支援システムとして、山口県が導入しているソルコム社の「教助」を使用し、成績、レポート提出、テスト結果、出席状況などを一元管理している。このシステムは通信制特有の運用に合わせてカスタマイズされている。生徒は公的なアカウントを持っていないため、オンラインツールの日常的な利用はない。重要な学習状況の通知は、月に 1 回機関誌「灯窓」として郵送で届けられる。

（5） ICT リテラシー（教員・生徒）について

教員向けに定期的な研修は行っていないが、新システムの導入時などに教頭が中心となって数回の研修を実施している。トラブル時は週 1 回来校するICT 支援員のサポートを受ける体制である。生徒へは、入学式直後に警察による情報モラル講習を行っている。スマートフォンの操作には慣れているが、PC スキルには個人差が非常に大きく、キーボード入力やファイル添付などの操作に不慣れな生徒も少なくない。

（6）オンライン学習の課題と今後の可能性について

オンライン学習を進める上での最大の障壁は、生徒側に学習用端末（タブレット等）がないことである。現状は、生徒の社会性や体調、気分の変動（当日にならないと出席できるかわからない等）を考慮すると、画面越しよりも対面での関わりや相談が重要視されている側面がある。予算等の課題はあるが、もし端末が配布されれば、履歴書の添削やレポートのデジタル送受信、一元的な学習管理などが可能になるとの期待はある。

（7）その他

生徒の 7〜8 割は 10 代だが、20 代から 80 代まで幅広い年齢層が在籍している。進路相談については、教務の中に進路担当（7 名）を置き、進学・就職の指導にあたっている。就職先は県内の事務や工場、サービス業が中心である。ハローワークや「山口しごとセンター」と連携しているが、遠隔地の生徒への支援の均質化が課題となっている。また、スクールソーシャルワーカー（SSW）による家庭訪問を通じた生活支援も行っている。

4　ICT・オンライン学習環境比較

聖光高等学校、誠英高等学校、山口松風館高等学校の 3 校における ICT・オンライン学習環境の比較と共通課題について、ヒアリング結果に基づき整理した。

4.1　3 校の ICT・オンライン学習環境の比較

項目	聖光高等学校	誠英高等学校	山口松風館高等学校
学習の基本方針	スクーリング（対面指導）を重視。オンライン学習はメインではない。	通学による対面指導が基本。オンライン学習はメインではない。	教科書と紙のレポート、対面指導が基本。オンライン授業は行わず。
生徒用端末	配布なし。生徒個人のスマホを利用。	配布なし。生徒個人のスマホを利用。校内に約 100 台のタブレットを保有。	配布なし。生徒個人のスマホを利用。校内に生徒が自由に使える端末もない。
LMS・校務システム	自元の業者によるフルカスタムシステムを運用。新アプリへの移行準備中。	以前は Access 自作。現在は「ぱんぷきんラボ」社のシステムへ移行準備中。	県導入のソルコム社「教務くん」を使用。通信制用にカスタマイズされている。
オンラインツール	Google ツールをメインに使用。全体集会でZoomを活用。	Google Classroom を連絡手段として導入。	生徒が公的アカウントを持たないため、日常利用はない。
校内 Wi-Fi 環境	フリーWi-Fi はあるが、生徒への開放は限定的。	安定しており、特段の課題はない。	教職員用は整備済みだが、生徒用は整備されていない。

4.2　共通する課題

・ 生徒の「1 人 1 台端末の不在」
3 校とも通信制生徒は「GIGA スクール構想」などの端末配布対象外であったため、学校から生徒への端末貸与が行われていない。これがオンライン学習やデジタルの活用を進める上での最大の物理的障壁となっている。

・ICT リテラシーの個人差とPC スキルの不足
生徒はスマートフォンの操作には慣れているが、レポートのデジタル作成、ファイルの添付、タイピングといったPC 特有のスキルには大きな個人差があり、不慣れな生徒も多い。また、各校とも日常的に使用しているオンラインツールが異なる（使用していない学校もある）ため、共通言語としての ICT リテラシーが身につかない。

・ 通信制特有の複雑な管理業務とシステム移行の難しさ
通信制特有の単位修得管理やレポートの受け渡し管理は非常に複雑であり、既存の汎用システムでは対応しきれない部分が多い。そのため、長年使用してきた自作・カスタムシステムから新しい LMS や校務システムへ移行する際、多額のカスタマイズ費用や調整作業が発生している。

・ 対面指導の重要性とオンライン化のジレンマ
不登校経験者など多様な背景を持つ生徒が多く、社会性の育成や精神的なケアの観点から「対面での関わり」が極めて重視されている。利便性のためのオンライン化を認めつつも、登校の機会を失わせることへの懸念や、リアルタイム配信をどのように「出席」としてカウントするかという制度運用の課題も存在する。

・ 人的リソースとコストの限界
ICT 環境を維持・管理するための予算（初期費用・メンテナンス費）や、システムを使いこなすための教職員側の人的リソースの確保が、さらなる活用拡大を阻む要因となっている。

5　考察

今回ヒアリングした通信制高等学校の現状と課題をふまえ、卒業生の受け皿となる専門学校が各高校と提携して構築すべき教育モデルとカリキュラムの方針について、調査結果に基づき整理した。

5.1　地域密着型人材育成モデルの必要性

現在、地域産業における人材不足が深刻化する中で、通信制高校という多様な背景を持つ若者に対し、職業的自立を促す実践的な学びの場を提供することが急務となっている。本事業が目指すのは、通信制高校との連携を基盤とした“育成・伴走・定着”の一体型支援体制である。しかし、ヒアリング調査から明らかになった「1 人 1 台端末の不在」「リテラシー格差」「人的・コスト的限界」といった課題は、専門学校へのスムーズな移行を阻む大きな障壁となっている。これらの課題を解決し、地域に選ばれる専修学校となるためには、以下の方針に基づくカリキュラム構築が必要である。

5.2　入学前からのキャリア教育と伴走型支援

通信制高校の多くは、不登校経験者への配慮から「まずは卒業させること」を最優先の目標としている。そのため、高度な専門スキルやデジタルスキルの習得は後回しになりやすい傾向がある。専門学校は、入学後だけでなく「入学前」からのアプローチを強化すべきである。

高校在学中からの連携授業

聖光高等学校のように多様な選択科目を設けている事例や、松風館高等学校の「特別スクーリング」などの機会を活用し、専門学校の教員が出張授業を行う。ここで、単なる学校紹介ではなく、AIやデータサイエンスを導入した「クロスオーバー型」の学びを体験させることで、将来のキャリア像を具体化させる。

心理的安全性に配慮した対面支援

3 校とも共通して「対面指導の重要性」を強調している。専門学校においても、オンライン化を急ぐのではなく、まずは対面での信頼関係構築を重視したオリエンテーションを充実させ、不登校経験を持つ生徒の不安を払拭する方針を打ち出す必要がある。

5.3　段階的なデジタルリテラシー教育と環境整備

「1 人 1 台端末」の不在と、スマートフォン操作に偏った ICT リテラシーの現状は、専門学校での学びにおいて致命的な格差を生む可能性がある。一方で、ICT リテラシーには個人差があり、各々

の習得度に合わせた段階的な教育を行っていくことが望ましい。

PC スキル習得のスモールステップ化
キーボード入力やファイル添付に不慣れな生徒が多い実態に合わせ、入学直後のカリキュラムには、ツールの使い方を基礎から学ぶ時間を設ける。特に、各校で利用ツールが異なる（Google, Teams, あるいは利用なし）現状をふまえ、共通言語としての ICT リテラシーを再構築する教育課程が必要である。

端末貸与と「学べる」環境の保証
高校時代に端末を所有していなかった生徒のために、専門学校側が端末を貸与する、あるいは BYOD（個人端末持ち込み）を前提とした購入支援制度の構築を検討する。また、校内 Wi-Fi の開放や、自宅でのオンライン学習を支えるための支援策を提示し、物理的な障壁を取り除く。

AI×データサイエンスの導入
「使える」から「活かせる」レベルへの引き上げを目指し、AI ドリルや生成 AI を活用した個別最適化カリキュラムを導入する。これにより、学力差がある生徒でも、自分のペースで専門知識を補完できる体制を整える。

5.4　地域産業に直結するキャリアパスの提示

通信制高校の卒業生の就職先は、その多くが県内の事務、工場、サービス業である。専門学校は、これらの地域産業を高度化させる人材を育成する役割を担う。

地域企業連携型の実習プログラム
通信制高校から就職した先の「企業リスト」などの情報を共有し、地域企業と連携したプロジェクト型学習（PBL）をカリキュラムに組み込む。実際の企業課題をAI や ICT で解決する経験を通じ、生徒に地域社会に貢献する職業人材としての自覚を芽生えさせる。

2 年間の枠にとらわれない継続育成
専門学校の 2 年間だけでなく、高校時代のキャリア教育から卒業後の定着支援までを一体化した、継続的な育成モデルを構築する。これにより、経済的・環境的理由で進学やキャリアアップを断念するケースを減らし、地域からの若者流出を防止する。

5.5　管理業務の ICT 化による教職員リソースの最適化

各高校が直面している「複雑な管理業務」と「人的リソースの限界」は、専門学校にとっても他人事ではない。リソースを共有して、負担を軽減する方向性を検討すべきである。

校務支援システムの共同活用と効率化

高校側が苦労しているレポート管理や出席管理のデジタル化ノウハウを、専門学校側の LMS（学習管理システム）と連携させることで、事務作業を省力化する。浮いたリソースを、生徒一人ひとりと向き合う対面でのメンタルケアや個別進路指導に再配分する方針を明文化する。

5.6　結論

通信制高校の卒業生を受け入れる専門学校は、単なる技能習得の場であってはならない。高校側が抱える ICT 環境の不足やリテラシーの個人差という負の側面を受け入れ、むしろそれを伸びしろに変える教育方針が求められる。

具体的には、

- 対面とデジタルを融合させたハイブリッドな伴走支援
- スマートフォンから PC・AI へと橋渡しする段階的リテラシー教育
- 地域産業と直結したキャリアパスの提示

これらをカリキュラムの柱に据えるべきである。これにより、多様な背景を持つ生徒が地域に根差し、デジタル社会の担い手として自立できる「県内初のクロスオーバー型教育モデル」が実現可能となる。

【別紙】通信制高校におけるオンライン学習環境／ICTリテラシーについて

学校名

回答者名　職名　☐ ←※回答者が校内ICT担当の場合はチェックをしてください。

氏名

※当てはまる項目にチェックまたはご入力をお願いします。（複数選択可）

学校・オンライン学習の取り組み方針について

1 学校の概要を簡単に教えてください（生徒数やコースの種類など）。

【生徒数】　全校生徒数　　名

通信制生徒数　　名

【コース・学科】

2 オンライン学習はいつごろから、どのようなきっかけで始められましたか？

☐ 1年前

☐ 3年前

☐ 5年前

☐ それ以前

【きっかけ】

3 現在、どのような形でオンライン学習を行っていますか？

☐ 完全オンライン

☐ スクーリングとオンラインの併用

☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 オンライン学習を進める際の方針や目標があれば教えてください。

5 ICTやオンライン学習の担当部所はありますか？

☐ ある

☐ ない

※「ある」を選んだ場合は、担当部所と担当者数をご記入ください。

【担当部所の名称】 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 【担当者数】 ＿＿＿＿ 名

授業の実施状況について

1 授業（スクーリングやホームルーム含む）において、オンラインツールを活用していますか？

☐ 動画配信

☐ ライブ授業

☐ デジタル教材

☐ 活用していない

☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

＿＿＿＿＿＿＿＿

2 リアルタイムのライブ授業や遠隔面談に利用しているツールは何ですか。

☐ Google Meet

☐ Microsoft Teams

☐ Zoom

☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

＿＿＿＿＿＿＿＿

3 オンライン授業はどのくらいの頻度で行っていますか？

☐ 毎日

☐ 固定回数

☐ 特に決まっていない

※「固定回数」を選んだ場合は、具体的な回数をご記入ください。

年 ＿＿＿＿ 回

4 オンライン授業を行っている科目を選択してください。

- [ ] 国語
- [ ] 数学
- [ ] 理科
- [ ] 社会
- [ ] 英語
- [ ] 全教科

5 授業の配信形式について

- [ ] リアルタイム（ライブ配信）中心
- [ ] 録画配信中心

6 授業の計画や実施について

- [ ] 教科担当者（個人）が管理
- [ ] 担当部所が管理
- [ ] 教科主任が管理
- [ ] その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

7 課題提出について

- [ ] 教科担当者（個人）が管理
- [ ] 担当部所が管理
- [ ] 教科主任が管理
- [ ] その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

8 生徒の出席や学習状況の把握はどのようにされていますか？

ICT機器やネット環境について

1 ICT環境の整備状況について（スクーリング時）

☐ 生徒が自由に使えるPC・タブレットがある　【PC】　　台　【タブレット】　　台

☐ 生徒が自由に使えるWi-Fiがある

2 生徒が自宅で使う端末や通信環境の状況は把握されていますか？

☐ 把握している

☐ 把握していない

※「把握している」を選んだ場合のみご記入ください。

2-1 生徒は個人のPCやタブレット、Wi-Fi環境をどの程度保有していますか？

☐ ほとんどの生徒がPCまたはタブレットを保有している

☐ 一部の生徒のみ保有している

☐ ほとんど保有していない

☐ 家庭のWi-Fi環境は多くの生徒が整っている

☐ 家庭のWi-Fi環境が不十分な生徒が多い

2-2 また、どの程度利用していますか？

☐ 授業や課題で日常的に利用している

☐ 必要なときにのみ利用している

☐ 利用頻度が低い／ほとんど利用していない

3 学校としてICT機器や通信に関する補助を行っていますか？

☐ 端末の貸与

☐ 通信費の補助

☐ 特に行っていない

☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 ネットワーク環境（Wi-Fiの安定性など）で困っていることはありますか？

☐ ある

☐ ない

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

5 教員のICT機器の整備状況について

- [ ] 一人1台PCを貸与
- [ ] 一人にPCとタブレットを貸与
- [ ] 共用使用

6 機器のトラブル対応やサポート体制はどのようにされていますか？

- [ ] 業者委託
- [ ] 担当部所
- [ ] その他

7 ICT機器の運用上の問題・課題

- [ ] 通信環境（通信速度）
- [ ] PC・タブレットの不足
- [ ] 維持費用

学習管理システム（LMS）の利用について

1 学習管理システムは利用されていますか？

- [ ] Google Classroom
- [ ] Microsoft Teams
- [ ] Moodle
- [ ] Zoom
- [ ] その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

2 どのような目的でそのシステムを導入されましたか？

3 主にどのような場面で使われていますか

- [ ] 授業
- [ ] 課題
- [ ] 成績管理
- [ ] その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 学習管理システム（LMS）に備えている機能、ほしい機能があればご記入ください。

5 システムの使い方に関する説明やサポートはどのように行っていますか？

ICTリテラシー（教員・生徒）について

1 教員のICTスキルについて、全体的な印象を教えてください。

2 教職員のICT活用スキルどのように学ばれてスキルを習得されてますか？

- ☐ 研修会の実施 [ ] 年 [ ] 回
- ☐ ICT担当者のサポート
- ☐ 外部委託
- ☐ 特に行っていない
- ☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

3 ICT活用が得意な教員が、どのような領域で中心的な役割を担っていますか？

- ☐ デジタル教材の作成（スライド・動画など）
- ☐ LMS（Google Classroom / Teams など）の運用
- ☐ オンライン授業の実施（ライブ／録画）
- ☐ ICT機器の設定やトラブル対応
- ☐ 教員向けのICTサポート・研修
- ☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 生徒のICTスキルや情報モラルの向上に取り組んでいますか？

- ☐ はい
- ☐ いいえ

5 生徒がオンライン学習ツールやデジタルデバイスを使いこなすための指導は行っていますか。

☐ 行っている

☐ 特に行っていない

※「行っている」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

6 ICTに不慣れな生徒や教員への支援はどのように行っていますか？

7 保護者へのICTサポート（接続・操作説明など）はありますか？

☐ ある

☐ 特にない

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

オンライン学習の課題と今後の可能性について

1 オンライン学習を進める中で、特に課題だと感じる点はありますか？

☐ システム操作

☐ 通信環境

☐ 生徒の集中力

☐ サポート体制

☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

2 改善したいことや、サポートが必要だと思う分野はありますか？

☐ ある

☐ 特にない

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

3 外部機関（専門学校、大学、企業、教育委員会など）との連携に期待していることはありますか？

☐ ある

☐ 特にない

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 今後、ICTを活かしてさらに改善したい取り組みや方向性があれば教えてください。

その他

1 ICT活用を広げる上で、最も大きな課題となっているのは何ですか。

- [ ] 初期費用
- [ ] メンテナンス
- [ ] 操作方法の習得
- [ ] 教員の業務負担（時間的余裕の不足）
- [ ] その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

2 学校のインターネット環境やサーバーの負荷、セキュリティ対策について、現状の評価と課題を教えてください。

3 学校でのオンライン学習やICT活用に関して、特に伝えておきたいことや工夫している点があれば教えてください。

令和 7 年度「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」
（人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム）
通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業

オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査（通信制高校）報告書

学校法人YIC学院
〒754-0021 山口県山口市小郡黄金町 2 番 24 号
●本書の内容を無断て‘転記、掲載することは禁じます。